原本
詳解
金瓶梅
卷二

東京圖書館
和書門
小說類
函
別三架
三二號
四冊

特40
34

春風居士譯編

原本譯解

金瓶梅

卷二

東京書肆

兎屋誠藏版

第二回　俏潘娘簾下に情を勾す　老王婆茶坊に技を說く

春風居士　譯述

武松い其日縣廳の前なる客舍へ歸到り有合ふ行李などを士兵に其地の百姓を步卒に取立たるをいふ持せて直に兄武太郎が家に移りしかば潘金蓮い金寶を拾ひし如き思ひをなし悅ぶと限りなくすなはち一間を掃除して武松をこゝに歇宿ませける翌朝武松早く起出しに潘金蓮もまた忙しく起來りて湯を沸して面を洗はせけるにぞ武松い身支度なし朝勤めにとて縣廳をさして赴くに潘金蓮い袖を扣へて勤のをはりなば疾く立歸りて朝飯を給べたまへ必す別處にな行きたまひそといふを武松い心得いひぬとて出行き程なく朝勤の終りしかば歸來るに金蓮い自から飯を設けて武松に食せしめ又手づから茶を捧げて與へしかば武松い嫂を勞するとの心苦しければ去きりに謝して嫂々自らかく手を下したまひて い某とれを受る次忍ひず明日い縣廳まで士兵

を呼寄せ召使に供しいふべしといへゞ金蓮い遠しくこれを止めてなどてや御身い
かく懇懃の事をのみいひたまふぞ一家の骨肉に他人を交ふべきとかい娘迎兒もあ
れども心に任せぬがちなれゞこれをさへ使ひはべらず況して彼の土兵あどい粗野
き男のみにしあれゞ食物を拵へさするも最汚からんといふに武松も爲む方なけれ
ゞさらゞ御手を煩はしいふべしとてさて止みぬ斯て五六日を過しけるに武松段子
一疋を取出て金蓮に贈りけれゞ金蓮いいたく打喜びて必ありて贈りたまふを辭む
も却て無禮ならん受收めて嚷着となし侍らんとていそ〳〵しく受收めしがこれよ
り武松は兄夫婦と一所に在りて毎日縣廳に出てい我が職を勤め或い遲く歸り或い
早く罷るもありて其時刻さらに定まらねども金蓮い少しも厭ふの色なく最懇に食
物を具へて進めけれゞ武松心中甚だ安からず金蓮いやゝ親むにつけ時々ほのめき
たる言の葉もて武松が心を誘ひ見れどもとより其心鉄石の如くにて少しも應す
る景色なきにぞ金蓮い只願もどかしく駒の慾火の滅ゆる時あし去程に光陰に關守
なけれゞ昨日と過ぎ今日と暮して早一月餘を過しけるに時しも十一月の寒天にて

日々に北風緊く吹き形雲四方に遍く布きて看る〳〵大雪降來りて世界い變して銀もて造做せるが如くとなりしに其翌日武松朝勤にとて縣廳へ出仕せしが日中に至れどもいまだ歸らず武太郎心の中にて待わびをりけるところ金蓮ひたすら促して商業に出遣りければ武太郎い心ならずも擔兒を挑ひて街へと出行きぬ跡にい金蓮いろ〳〵しく間壁の王婆を頼來て酒肴を買調はせ今日い是非とも武松に酒を勧て日頃の情を述べん者をと思ひつゝ簾の下に佇立て武松が歸るを待つほどにかゝるべしといい知らぬ武松い雨具もて雪を凌ぎ地上に積る亂瓊碎玉を踏破りて歸來つやがて門口を開入れば金蓮い忙しく簾を推揭げて廡縣廳も塞かりつらむになどて歸りの遲かりしやと問ふに武松い會釋して今朝い偶然相識に出遇ひ朝飯の饗應を受け又酒を强ひられたれども何とかして快からず覺えけるまゝ辭して立歸りしなりと答へて己が部屋に入れば金蓮もまた附添え來て先程より火の用意をもなしおきつれば向りたまへといふに武松はこれを謝して爐火の邊に座しければ金蓮いそがはしく迎兒を呼て前後の戸口を鎖させ自から酒肴を搬來りて列ぶるにぞ武松い威儀を正ふして兄い何方に行きたまひしぞと問へば金蓮い今日も生業にとて出行きたまひしがいまだに歸りなさず先づ妾と御身とにて一盞を傾けはべらむといふを武松は固く辭してさあらば兄の歸りたまふを待て共に飲みしふべしといへども金蓮い聽かずしていかでろれにい及ぶべきといふ間に迎兒早くも一注の酒を搖めて持來りしかば金蓮もまた爐の邊に近く座して杯を取擧げ先づ飲みたまへねとて送しければ武松も今いせむ方おく盃を受けつ一息に飲み乾しゝかば金蓮い又ふたゝび盃に滿々と篩ぎて勧めけるを武松あれをも受飲みまた二盃を篩ぎて金蓮に返しけるに金蓮いひたすら打笑ていふやう此程人の傳說を聞くに御身い縣廳の前街に一人の唱的を圍みおきたまふよし是い實にや語りたまへかしと聞ゆれば武松は詞を正ふして嫂々必す人の詞を信したまふおかれ武松もとより色を好まねばなどて然る戯狎き事を仕るべきといへば金蓮い哈々と打笑ふてあい口と心とい違へはべらんといふを武松い倘ほも又嫂々もしあれを實としたはずば兄に問ひたまへといふを金蓮聞敢へず吾が夫がなどて是等の事を得知るべきもし斯る事まで推量の届

く性にしあらざいかで果敢なき餅商して世をば送らめやそれらの事ゝとまれかくまれ先づ酒を過したまへかしなど語りつゝ去きりに盃をとりて武松に勧め又己も飲みしほどに春情ます〳〵動きて止まずひたすら戯言をもて武松を挑むに武松ゝ早くも八九分ゝそれと悟りしゆゑたゞ頭を低るゝのみにて詞なし金蓮ゝまた酒を盪て來らんとて立去りければ武松ゝ火筋をとりて火を弄し心大に悦ばず沈吟しつゝあるとゝろ金蓮ゝやがて又酒を携へ武松が傍近く來りて片手もて武松が肩を担りて此薄着にてゝ寒くゝおはさずやといふに武松ゝ是ゝ怪しき振舞かなと心中ひそかに憤りて答へもせず尚ほも火筋を搖り頭を抵れてゐたりしかば金蓮ゝ武松が答へざるを見て急に火筋をもぎとり口程にて尚ほも艶言を吐きしかば武松ゝますゝ焦躁たれども尚ほ聲を出さずして居りけるほどに金蓮ゝ慾心ます〳〵熾にして武松が焦躁をも知らずやがて盃に酒を篩ぎて自から一口飲畢り猶ほ半ほどを剩し武松に送して御身もし心ありあば此の殘酒を吃みたまへといひければ武松今ゝ耐べがたく忽ち金蓮が持つたる盃を取つて壘に投捨怒れる聲音高やかに我れゝ是れ道を知り義を守る大丈夫にて彼の人倫を破り風俗を汚するの徒とゝ同じからず嫂々いかなれば斯く羞恥を識られざるぞもし淫狎れたる行あるを見あばたとへ我ゝあれを忍ぶとも我が此拳ゝ決して嫂々を餞さむや反す〳〵も心得ぬ振舞かなと辱しむれば金蓮ゝ忽ち面色を赤らめつゝ急に迎兒を呼て盃盤を收拾させ口裏にて我ゝもとより一時の戯にてあるものをなどてや人のこれを眞とゝしつらん實に拙き心底かなゐど咳きつゝ厨下をさして立行きけり此時はや申の刻も下りしかば程なく武太郎ゝ商賣を完了て歸り來つ担兒をおろし内へ入り見れば金蓮ゝ兩眼に涙を含み顔色いたく赤きにぞ心にこれを怪みていかなる故ぞと事の由を問ふに金蓮ゝ涙を拭ひて我が夫ゝ愚にておはすゆゑよしなき人を引入て妾に耻をかけたまふゝ最もつれゐき事にてはべりといふを武太郎ゝます〳〵訝りてよしなき人を引入て御身に耻をかくるとゝいかなる事ぞと問返せば金蓮ゝ最腹立しげに今日武松が雪を冒して歸りたるを憐れに思ひ自ら酒を取出て飲せつるにあるべきとかゝ妾を捉へて搔口説きしを漸うにて退退けぬ是ゝ決して妾が僞りにてゝはべらず迎兒が

よき證人におそといへば武太郎ハ頭を振りてそれハ御身のいふとながら我が弟ハさる不義の振舞すべきものにあらず必ず聲を高めて隣家の人に笑はれおとしめていそがはしく武松が部屋に走行て御身點心朝夕の飯の外に食するものをいふ輕耕錄に今以早飯前及飯後午前午後晡前小食爲點心など見ゆ菓子を欲しからずや欲しうば共に吃ふべしと何氣なくいひけれども武松ハ一言をも答へずたゞ思案してゐたりけるが忽ち搶と身を起して戸外に駈出しかば武太郎ハ大におどろき聲を高めて御身何處へ行くぞと呼留れども武松ハ更に耳にも入れずひたすら縣廳をさして走り行きぬ武太郎部屋に回て金蓮に打向ひ武松我が留むるをも聽入れず縣廳の方をさして出行きしハいかなる意にてやあらんといへば金蓮ハ冷笑て彼嚴ハ其身の不義を告げられしと思ふによりて遠しく逃てこゝをば去りしにて必ず行李をも搬びて他所に移るならん留めたまふおとなかれといへば又武太郎ハさハさりながら若し弟が移行かば人の物笑となりぬべしといふに金蓮ハまず〳〵腹立て武松が妾を挑みてもそハ物笑とならざるや熟と考へ見たまへかしされども御身もし強て武松と一所に居りたく思ひたまはゞ妾に休習を與へし後心の隨にあしたまへといふに武大郎ハ點頭くのみにて詞おくれたゝ心中にて悶へ居る折拐武松ハ忽ち一人の士兵を從へて立歸り我が行李を收拾て挑はせつゝ又忙しく出行くにぞ武太郎ハいいそぎ追ひゆき引留めてば身ハ何の故ありて他處へハ移りゆくぞと問へば武松は兄上必すこれを問ひたまひそもしあれをいふ時ハ大に家門を汚すべければたゝ某に任せて移らしめたまへと言捨士兵をいそがし立て立去りければ武大郎もふたゝび問ふによしなく悄々として其爲すまゝに任せてけるに金蓮ハ倘ほ喃々と武松を罵りて止まず斯て武松ハ其日より又縣廳の門前ある客舍に移りて日毎に出勤したりしかば武大郎ハこれを訪はむと思へども金蓮屢々これに迫りて武松ハ獸にも劣りたる不義者なりば身必ず訪問音信をしたまひそ若しこれを聽きたまはずば妾速に身の暇を乞て立去らむ必ず忘れたまふなかれと囁せしかば武大郎ハたゞ應諾するのみ倘ほ疑ひハ解ねども金蓮に知られんを怕れて日數經るまで武松を訪ふことと絶えてなかりけりこゝに此清河縣の知縣ハ任に到りてより已に二年餘に及び多くの金銀を蓄へしかばひそかにこれを東京の

親戚の方へ預けんと思へども等閑の者に命して送遣らバ途中にて盗賊の難あらんを恐れおにとぞして一人の豪傑を得て監押させばやと圖る折から忽ち武松の事を思ひ出しけれバ是れぞ屈竟ならんとて即日武松を傍近く召寄て我が親戚朱勔といふ者東京に於て殿前大尉の職を奉してあり我其許へ一荷の禮物を送らんと思へども途中心元おけれバ汝もし勞を厭はず監押して東京に赴きゝバ歸縣の後重く恩賞を行ふべしといふに武松謹て某恩相の擡舉を蒙り面目身に餘りぬいかで勞を辞みいふべき仰のまに〳〵出立仕らんと答へしかバ知縣大に喜び賞なりとて三盃の酒を與へ又路費十兩とを取らせける去程に武松ハ知縣の命を受て下處に歸りしがやがて士兵を街に走せて酒肴を調はせそを齎して兄武大郎が家に來にけるに此時武大郎ハ商を完了て折よく家にあり金蓮ハ一たび武松を怨みたれども其餘情いまだ絶えずありけれバ早く武松が來ぬるを見て心の中にさてハ此人去る日ハつれあかりしも今ハ我が事を思ひ出して來れるならん先づ慢々と心の底をも問見んと思ひにけれバ化粧を直し衣服を着換つ忽ち含笑みて出迎へ此頃ハ絶えて音信をもしたまはざるゆゑいたく心を痛はべりしが今日ハ又何の幸ひに訪ひたまひしぞと聞ゆれバ武松ハ會釋して某要用ありて兄に告むためにまゐりたりといふに金蓮ハさらば樓に登りて語りたまへとて夫と〻もに武松を引て座に請すれバ武松ハ齎したる酒肴を開きて夫婦に勸むるに金蓮ハひたすら眼を以て武松に情を通すれども武松ハ見遣りもせず盃數巡にいたるに及び迎兒に吩咐て勸盃を取出させおれに酒を滿々と篩て手にさゝげつゝ武大郎に向ていふやう某今日參りしハ暫時の別を告むためなりとハ某此度俄に知縣相公の命を受け東京に上るにつき明日ハ即ち發足いたすあり但し一時の用向なれバ遲きも二ケ月早き時にハ四五十日の中に皈るべし因てハ某兄上にゆ入れたき一言あり兄上ハ元來心正直なれども懦弱くましますゆゑ我もし此地に在らざりせバ恐くハ人に侮れたまふとあらんかゝれバ明日よりたとへ商業に出たまふとも必ず遲く出て早く歸り決して人と酒を酌交したまふなかれ斯して毎日早く門を閉て人の口舌を免れたまふべしもしろれにても倘ほ侮る者のありともたゞ忍耐へて爭ふとなく某が歸るを待ちたまはゞ某必ず事の當否を論すべ

し兄上もし某が此詞に從ひたまはんと思ぼさば此盃を飲干て誓ひとなしたまへといふに武大郎ハ盃を受取て御身の詞極めて理あり我必ず一々これに從ふべしとて遂に其酒を飲干ければ武松ハ又ふたゝび其盃に酒を滿々と篩ぎ金蓮に打向て嫂々ハ元來恰悧き人なれば某多言を費すにハ及ばねどもたゞ我兄ハ其性質朴にしあれば全く嫂々が助を頼むのみもし嫂々が堅固に家をだに守りたまはゞ兄も別に憂ふる所ハなかるべし古人の語にも離牢ければ大入らずといふにあらずやといへば金蓮ハ聞きもをはらず忽ち怒れる聲を振立て夫に向ひあな御身いかゐる事をひそかに弟に告て斯く妾を辱めさせたまふぞ妾ハ是れ女の中の男子といふも耻かしからぬ氣性にて妾御身の許へ嫁來りしより以來蟻一箇だにも家の内に入れずさるに籬牢ければ犬入らずとハ何の事ぞや斯る胡亂の詞ハ他人ハ知らず妾ハ聞くべき覺えなしと罵れば武松ハ呵々と打笑て嫂々の詞に僞りなくば我等兄弟少しも憂なしたゞ口と心と相違したまひそ我今慥に嫂々の詞を心に記えおきぬ爲のために此盃を傾けたまへとて手に持たる大盃を差出せば金蓮ハ答もせず盃を押退つ搶と立て樓を

下り胡梯の中段に立といまりて罵るやうは身ハ聰明き人なれば嫂の尊きとハ知りつらんにあゞとて斯く無禮ある妾向きに此家に嫁ぎし時ハ小叔あるを知らざりしが何處よりか出來りてさかしら立て事をあすにやいと悔しきに堪へずかしとて聲を擧て大に泣きつゝ胡梯を下りて厨の方へぞ行きにけるされども武松ハ是等の事に少も管はらず猶ほ幾多の盃を勧めをはりやがて別を告て下りしかば武大郎ハ去きりに戀々としては身必ず一日も早く立歸てたべと涙ぐみながらにいひければ武松ハひたすら感めて必ず憂ひたまふなかれ用だに濟みなば速に立回るべし明日よりハ商賣に出たまはず家に在て心を寛げたまへ日毎の入費ハ某より人を以て送りまゐらすべし此儀を心得たまへねとて倘ほ懇に其餘の事を告げつ共に涙を洒ぎて別れけり斯て武松ハ下處に立歸り行裝を整へ次日知縣の禮物を受取り遂に濟河縣の地を離れ東京さして赴きけるとぞ去程に武大郎ハ武松に別れし後毎日妻に口さがなく罵らるれども心の中にて堅く武松が誡を守り少しもこれと爭はず商賣も常よりハ早く完了て家に歸り簾をはづし前後の門を閉ぢたゞ家に坐して他出するともなか

りけれバ金蓮ハ此体を見必大に焦躁て日ハ猶ほ半天におるにハ身などて早や門を閉ぢたまふぞ四隣の人々ハこれを見て笑罵ると止まずハ身ハたゞ弟のみを恐れて人の誹りも厭ひたまはざるこそ拙けれといへバ武大郎ハ頭を掉りてもし世の人我を笑はゞ笑へかし弟あがら武松がいひし詞ハ皆理あり我いかでこれを用ひざらむやといふに金蓮ハ尚ほも聲を振立てハ身懦弱しといへを均く是れ男子あり自ら分別をあさずして人の下知をのみ受けたまふハ愚の極とやいはましと罵れども武大郎ハ尚ほ又我わくまで弟が詞を守る必得なり弟がいひし所ハ皆金玉の如しとて更に聽くべき景色もあきにぞ金蓮ハます〳〵怒りてそれより日々夫を罵りしかど武大郎ハ少しも爭はずたゞ毎日晏く出てハ早く歸り前後の門を閉づるとすべて武松の教の如くせしかバ金蓮も遂にハ罵り疲れて自から靜り却て武大郎が歸る時刻に至れバ先自ら簾をはづして門を閉ぢしゆゑ武大郎ハこれを見て必ひそかに悅びあたりける斯るほどに其年も早く暮れ明年の春となり天氣いと長閑の頃とありしかバ金蓮ハ華美やかに粧ふて門に立ち往來の人を打眺めおどしてありけるがやがて午も過ぎ夫の歸るべき時分と思ひけれバ自ら門を閉んとて父竿をとりて簾をはづせしところ折しも其外を一人の男が過りけるが事の正に起るべき時にやありけん一陣の風忽ち吹來りて簾を動かすよと思ふ間に金蓮が持たる父竿思はず手の内より滑落て右の男の頭を打ちしかバ金蓮ハ呀阿と驚きて忙く右の男を見るに年の頃ハ三十五六にて服飾いと華奢に打扮たる風流男子なり右の男も大におどろきて厭くまで其無禮を罵り懲らさんと思ひコヽ早くもこれを回顧れバ思ふにも似ぬ女房のいと美はしき容貌に怒らんとせし擬勢もぬけ魂も浮るヽばかりに見とれ果て只茫然として立たりけり此時金蓮ハいそがはしく跪きて覺えず風に手を滑らしたく無禮を仕りぬいかで饒させたまへかしと賠れバ男ハ手もて頭巾を整しつヽ小腰を屈めていあ打置せたまへかしかばかりのと何かあらんといふ間に間壁なる茶店の王婆が早くも見て此簾下を素通したまふ大官人をバよくも身ハ打たれしよあと戯れかくるを男ハ打笑ふて是ハ却て我らが疎忽ありし饒させたまへと同く賠てそがまヽに立別れ彼方をさして赴けども殘りをしかの妻恐しげに凡ろ七八回ば

かり回顧り〳〵立去りけり抑も此叉竿をもて頭を打たれ圖らず金蓮を見初めたる右の男ハ是れ即ち別人あらず富豪を以て世に名たゝる彼の生藥舗西門慶あり西門慶は妾卓二姐か近きころ死亡り心鬱々として樂からねバ今日しも街を閑走して彼の梢巳人應伯爵が許に尋ね行かんとて此處を通りしに料らずも此の事にハ出遇ひしありとぞ扨も西門慶ハ家に歸れども金蓮の事の忘れがたけれバいかにやせましと思ひを廻らせしが屹度王婆の事を想ひ出して我れ彼の老媼を語らひ如此如此に計りあバ此事成るに疑ひあしと心ひそかに定まりてハ食さへ更に咽にハ通らずいそぎ家を立出て直ちに王婆が茶店に來り程よきところに坐を占むれバ王婆ハ迎へて戯謔あどもて一二話をしかくるほどに西門慶ハ金蓮が事を問ふて抑も彼ハ雛人の妻にやあるといへバ王婆ハ戯れて彼ハ閻魔大王の妹にて五道將軍の女なり彼の者の事を問ふて何にかしたまふぞといふを西門慶打消て我ハ眞面目に問ふものを戯れハ置きねがしといふに王婆また答へて大官人ハ彼を知りたまはずや彼が夫ハ日毎に縣廳の前に徘徊して食物を賣る男なりといへバ西門慶さてハ棗糕を賣る徐

三が妻あらんといひもをはらざるに王婆ハ手を搖てもし徐三ならバ相應の夫婦なるべけれど彼が夫ハ倘ほ醜しふたゝびこれを辨したまへといふに西門慶ハ頭を傾けてさらバ饅餅賣李三が妻あるべしといふを王婆ハ又打笑ふてもし李三ならバ好き一對の夫婦ならんといふに西門慶ハ又考へてさてハ花胎膊陸小乙が妻あらんといふを王婆ハいあ陸小乙もし彼が夫あらバ却て相應の夫婦あるべしといふにぞ西門慶も今ハ詞尽きて我實に猜しがたかり疾く語り聞けたまへといへバ王婆ハいよ〳〵聲高らかに打笑てさらバ彼が夫の名を語りて大官人を驚かしまゐらすべし其人ハ餅を賣る武太郎にて侍べりといふに西門慶はひたと呆れて武太郎とハ彼の世の人が三寸釘谷樹皮と諢名をつけたる醜男子のとならずやといへハ王婆ハ即ち其矮漢にてはべりと答ふるにぞ西門慶ハいたく嘆息して世にハ美人のなきにあらねど彼が如きハいと稀れなりさるにいかにして彼の餅賣の妻とハなりけるぞや最惜むべし〳〵といへバ王婆は含笑てさのみ怪みたまふとかは古より駿馬却て痴漢を馱て走美妻常に拙夫に伴て眠といふとあり是も亦月下老の所爲にこそといふに西

門慶も然ありと答へて又其事を言出てさりしがいかにもして此老嫗を喜ばせんと思ふにぞやがて又詞を改めて此身の悴王潮い此年頃絶えて見えざるが他國へ行きしかいかゝせしぞと問ふに王婆いその事なり或る旅商人に從ふて他國に赴きしより年を經れとも今に歸へらず其後絶えて音信あきゆゑ生死とても定にはべらずといふを西門慶打聞てさらば遠かに好便りをもて呼返へし我れらが方へ遣あされよ彼れい中々怜悧の性なれば物の役にも立つあるべしといへば王婆い大に喜びても大官人が悴を擡舉たまはらばあれに超すべき幸ひあしといふに何かの事い當人が歸へりし上にて談合すべしと言畢り西門慶いやがて身を起して店を出去りけり王婆い又茶を煎じて客もや來らんと待つところ約莫二時ばかり過ぎて西門慶又入來りて門首なる簾の下に坐して武大郎が家を窺見ることあきりあり此時王婆い梅湯を拵へ西門慶に飲ましむるに西門慶い飲畢りて此身梅湯を拵ふるに甚だ巧あり此身が方にい尚幾多の梅湯ありや餘あらば所望したしといふを王婆い故と聞ひがめたる面持にて我ら一生媒をあしたれども餘れる女い一人もあしといへば西門慶い打笑て我い梅湯の事をあそ問ひつるに御身い誤て媒となす是い大に差へたりといふに王婆い答ふるやう梅と媒とい同き音ゆゑ我らい媒をなすやと問ひたまふと聞ひがめ侍りぬと聞きもをはらず西門慶い御身果して媒をあし我がために好媒をせられなば骨折賃い厚くまゐらすべしいかに〳〵といへば王婆い大官人の戯事したまふき聞き大娘子の腹立たまはゝいかにかせむと打聞ゆるを西門慶いあ我が女房い妬心い少しもなし既に今も三四人の妾ありて身邊近くに召使へど心に合ふい一人もあきゆゑ御身もし心當のあるあらば速に告知らせよといふに王婆い又答へてそれにつけては此程一人の美女を見置きたれども大官人の心に合ふやいかに其容貌は尋常ならねどたゝ惜むべきい年紀長けたりといふにそ西門慶門含笑て人に優れし客貌あらば年の長けしい苦しからず凡そ幾歳ぐらゐぞやと問返せば王婆いされば なり彼者癸亥の生れあれば今年い慥に九十三歳あらんといふに西門慶いいたく打笑て風婆子何ぞかゝる戯をいふやと言捨てやがて坐を起ち出行きけり此時天色漸う暮れければ王婆い燈を點して門を閉んとせしところ西門慶又忽ち入來り

て簾の下に座し前の如くひたすら武大郎が門口を覗きしかゞ王婆ゝ進みよりて大官人和合湯を飲みたまはむやといふに西門慶尤も好しと答へしかゞ王婆すなはち和合湯を捧出しければ西門慶ゝ飲畢り尚ほ幾度となく隣家の方を見遣りつゝ何れ明日又來るべしとて其夜ゝ遂に家に歸りけり扨西門慶ゝ家に歸りてもひたすら金蓮の事のみを思ひ寢食とても安からぬ体あるを妻の呉月娘も見知れども是ゝたゞ妾阜二姐が此程身亡りしを悲みてのとあらんと思ひてさまで心にも懸けざりしとぞ去程に其翌朝王婆ゝ起出て門を開き外面を見るに西門慶又早く門の邊を往つ戻りつしてありければ王婆心の中にて彼いかで斯く心忙きや我いさゝか計を施し其金銀を貪り取らんものをと悦びつゝすなはち素知らぬ顔して茶を煎じゐたるところ西門慶忽ち店へ入來り簾の下に坐を占め又ひたすら頭を傾けて武太郎が門口を窺望む王婆ゝ尚ほも知らぬ体にもてあしたゞ風爐を搧ぎゐたるにぞ西門慶ゝ耐へずやありけん王婆の方に向ひ茶を所望いたしたしといふに王婆ゝ始めて心附きし体にて進來り大官人ゝ此程絶て此邊にゝ見へたまはざりしが今日ゝあにとして我

が店にゝ來りたまひしぞと戯れながら濃々と稠茶を點じて捧げければ西門慶ゝ手に取て先身我に相伴して茶を吃みたまへといふに王婆ゝ含笑て大官人の宣ふ行貨ゝ外にあり我らが相伴にてゝいかで興のはべらんやといへゞ西門慶もまた打笑ひつゝやがて又詞を改めて此間壁ゝ何を以て生業とするぞと問へゝ王婆ゝ手を使ふて阿呀大官人の物忘れの早さよ餅を賣るを以て過活といなしはべるにあらずやといふに西門慶ゝ然あり〳〵我も彼の家にて買ふ餅ゝ名物の響高きよしをかねて聞及びぬ今四五十の餅を買ひ家土産にせんと思ふがたゞし家主ゝ家に居るやいかにといふを王婆ゝ又答へてもし彼の餅を買はんと思ひたまはゞ彼の家主が少間街に出て賣るを待て買ひたまへいかで自身其家に到りたまふに及ぶべきといふに西門慶ゝ然ありとてやがて店を立て出行きければ王婆ゝ尚ほ簾の邊に在りて窺見るに西門慶ゝひたすら武太郎が家を差覗きつゝ一遭ゝ西に行き一遭ゝ又東に來り往來するうと凡そ七八遍にして程なく又王婆が茶店に入りて坐す王婆又戯れて大官人此程ゝ久しく拜謁を得ざりしといふに西門慶ゝ哈々と打笑ひつゝ懐中より銀子一

兩を取出し王婆に與へて些少あれども茶錢にまゐらせんといへば王婆ゝ是ゝ茶錢にゝいと多かりといふを多少ゝいはず先づ受收めたまへかしとて取するにぞ王婆ゝ心の中に思ふやう斯斯早く破の小端を露したり慢々これを釣るべしと打喜びつゝすあはち銀子を取收めて大官人ゝ此頃心よかゝる事のありて焦躁ちたまふやうに思はれはべりといふに西門慶ゝ点頭ていかにも我に一の心事ありはべ身いかにしてかれを猜したるぞと聞きもをはらず王婆ゝ含笑て世の諺にも門を入りて菜枯の事をな問ひそ先づ容貌を觀て知るを得べしといふ事あり我らはいかなるむつかしき事なり共猜するに少しも違ふとはべらずといへゝ西門慶さらばはべ身我が心事を猜して見よ猜しあてなば銀子五兩を取らすべしといひもをはらざるに王婆高く打笑ふて此事猜せむにいと易したゞ一言に猜し當つべければ傍近く來たまへとて聲を潛めつゝ大官人が此兩日此邊に徘徊したまふゝ彼の間壁の人の故あらん此猜し方ゝいかにぞやと背を微と拍てば西門慶ゝ大に喜びてはべ身が智ゝ隋何名人のに勝り攜ゝ陸賈名人のに過ぎたり恐るべし〳〵我昨日偶然彼人を見初めしより魂浮田て留むる術を知らず忘れんとするに忘られずして飲食さへも甘からず御身あれを救ふの手段ゝあきやいかにといへば王婆ゝ又我ら三十六歳の時夫に別れそれより復ゝ茶店を開きつれども斯るはかあき業のみにてゝ過活とするに足らず故に專ら是等の事を幇襯て糊口の助とすありかゝれば彼人を手に入んゝ最容易きとにころと答ふるにぞ西門慶ゝます〳〵喜びて御身もし首尾よく此事を做遂げなば銀子十兩を取らすべしといふに王婆ゝ哈々と聲を放て我らゝ戯をいひけるに大官人が眞としたまふこそ可笑しけれと打笑ふてぞゐたりける

第三回

挨光を定めて王婆賄を受く
圈套を設けて淚子私に挑む

西門慶ゝ一心に潘金蓮を思初めよりもし此事を做遂げあば王婆に十兩の銀子を贈らんといふに此時王婆說出していふやう抑も此挨光といふはいと難き事にして必ず五件を備へざるべからず先づ其第一ゝ潘安名人のが容貌第二は貨を惜まず第三ゝ登通名人のが富第四ゝ苦を忍ぶ第五ゝ毎日多くの閑暇ありもし此五件尽く全からば

此事成就すべし若又此五件の内一も缺くるとあらば寧ろ思切りたまふべしといふに西門慶答へて乾娘よ心を勞したまひそ我すべて此五件を能すべし第一我が容貌潘安にも及ばずともさまで醜きともあるまじ第二も我が家に蓄ふる金銀も費ひ尽すとも決して惜しと思はず第三も我が富豁通が如くならずとも使用ふに事をば缺かじ第四も我忍耐の二字を守りたとへ此身を打擲さるゝとも決して敵對すまじ第五も我尤も閑暇あり然らずばいかで斯く毎日此邊に來るを得べきかゝれば御身是等の事にも掛念せず我がためによく計りて事成就あさしめよ然らば厚く骨折料を取らすべしといへば王婆又いふやう大官人も此五件みな全しと宣へどもたゞ一事埒明くまじと思ふなりといふに西門慶も許りて一事埒明かじとも何等の事なるぞ語りたまへといへば王婆も点頭て我今あらぬにかすべければ必ず腹立ちたまふあかれ凡そ此挨光も尤も難き事にして十分の中九分九厘まで錢を費すもゝし僅に其一厘を缺くときも事決して成就ありがたし大官人も其性もとより慳吝ければ濫に錢も使ひたまはじたゞ此故に埒明くまじとかせしなりと聞きもをはらず西門慶も

其事あらば甚だ易しもし金銀を使ふべき所あらば全く御身が指圖に任すべしいかでおれを慳まめやといへば王婆も又点頭てもし其詞に偽りあくば我ら一の計ありこれを行ふ時に於ても大官人は忽ち彼人と遇ふを得たまふべしといふに西門慶も大に喜びてさて其計といふはいかなる事ぞと問ふを王婆も打笑て今日も早日も暮れぬ先ご貴宅へ歸りたまふて半年又も三月を過して再び來たまはゞ其時語りはべるべしといふにぞ西門慶も驚きて乾娘よ人を苦めたまひそ我が思を遂げさせたまはゞ報酬も御身が心のまに〳〵すべしといへば王婆も又哈々と打笑て我が計も極めて妙ありさらばおれより語りはべるべし抑も彼婦人にもと是れ賤き者の女なれども其性甚だ伶悧にて縫針女工吹彈歌舞いふも更なり双陸象棋に至るまで一として通せずといふもあし小名も金蓮と呼做しもと潘氏の女にて親も南門外に住みし潘裁といふものあり金蓮も後張大戸の妾に賣れてしばらく其家に在りしかど張大戸が年老たるにより武大郎に與へて妻ともなさしめぬ彼の夫婦こゝへ移り來しより我といいたく親くして日毎に往來することとなりされば今大官人もし

此事を遂んと思ひたまはゞ藍紬一疋白紬一疋白絹一疋弁に綿十兩を買ひ我に交付したまへ然らば我武大郎が家に往き金蓮に對ていふべきゝ我或る富豪家より一襲の衣料を賜はりぬ然れどもいまだ縫はざるゆゑ娘子我がために曆を開て吉日を擇出して賜はれかし然らば急に裁縫工を央ふてこれを縫はしめんと語るべし此時も彼人煩しきを嫌ふて悅ばざる色あらば此事すなはち思切りたまへ若又彼人我御身がために縫ふべければ必す裁縫工を僱ひたまふなかれといはゞ是れ即ち一分の賴あり其時我彼人を我が家に請て縫はしむべし然るを彼もし己が家にて縫ふべきに衣料を此方へ持參せよといはゞ此事すなはち思切りたまへもし又然らずして我が家に來て縫はゐんといはゞ是れすあはち二分の賴あり彼もしいよ〳〵我が家に來りて縫ふ時ゝ必す酒肴を取出て欵待すべしさかるに御身の家にてゝ不自由にて事調へがたし我が家に持歸りて縫はしめよといはゞ此事すなはち思切りたまへ彼もし次の日も同じく我が家に來りて縫はゞ是れ即ち三分の賴あり大官人此兩日に來りたまふとなかれ第三日目の午時前後にいたり大官人例よりも一層美々しく打扮て我が店に來りたまひ咳嗽をもて相圖としたまふべし此時大官人ゝ門口に佇立ていひたまふべきゝ此頃ゝ世の事に繁はりて久しく音信れざかりしが王婆ゝ恙なきやと呼びたまへ我あれを聞き走出て直に大官人を迎へて房裡に入れまゐらすべし彼人もし大官人の內に入りたまふを見て急に己が家へ逃回らばあれを留むると能はざれば此事すなはち思切りたまへ彼もし大官人の入りたまふを見ても其身を動すとなければ是れ即ち四分の賴あり大官人已に坐に就きたまひなば我彼人に向て此官人ゝ即ち我に衣服を悉みたまふたる方ありと語りて口にまかせて大官人を褒稱ふべし大官人ゝ又彼人の針線に長けたるよしを賞美たまへ彼もし頭を低れて一言の答をもなさざれば此事すあはち思切りたまふの外あし若又彼詞を開きて返答するとあらば是れ即ち五分の賴あり我此時又大官人に對ていふべきゝ此娘子勞を憚らず我がために手を下してこれを縫ひたまふ我いかなる僥倖にや思はず二人の恩顧を得たり一人ゝ銀を出し一人ゝ力を出したまふ我せめてゝ娘子を欵待さまく思へども力及はずあはれ大官人我に替て主人となり此娘子を欵待してたびたま

はゝ此上の厚恩なかるべしと深く頼みまゐらすべし大官人いこれを聞て銀子を我に與へ酒肴を買はしめたまへ彼人もし此体を見て坐を起たゞ我又これを引留めがたし此事すゐはち思切りたまへもし又彼此体を見ても猶ほ身を動すとなけれゞ是れ即ち六分の頼あり我銀子を受取り門を出んとする時彼人に向ていふべきい我が歸るまで娘子此大官人に陪してたべといふべし彼もしこれを聞き身を起して己が家に避行かゞ是れ又留めがたきにより此事すなはち思切りたまへ彼もし坐を離れずして在らゞ是れ即ち七分の頼あり我又酒肴を買來り搬出さんとする時又彼人に向て娘子先づ仕事を收拾て一盃を傾けたまへといふべし此時彼去きりに辞みて己が家に歸らゞ此事すゐはち思切りたまへ彼もし口にい辞退すれども更に身を動さざれゞ是れ即ち八分の頼あり彼已に大官人と丶もに酒を飲み興や丶闌にいたる時我故と酒尽きたりといふて再び大官人に酒を買はしめん大官人い銀子を取出して我に與へたまへ因て我い酒を買ひに行く体にもてなし急に前後の門を鎖すべし大官人と彼と兩人にて房裡に殘りたまふ時彼人大に焦躁て逃歸らゞ此事すゐはち思切りたまへ若又我にまかせて門を鎖させ少しも焦躁つとおけれゞ是れ即ち九分の頼あり已に九分い調ふたるもたゞ餘の一分尤も難しとす大官人彼人と丶もに房裡に殘りたまふ時たゞ情深き詞をもて彼が心を悦ばしめたまへ必す躁燥て事を誤りたまひそもし大官人心短くして事を做損じたまふそおらゞ我始めより決して此撃視をいたすまじ大官人彼と丶もに卓子に向て酒を飲みたまふ時故と袖もて筯を拂落したまひ慌しくおれと拾取る体にもてなしつゝ手を伸して彼人の脚を揑りたまへ此時彼もし驚闘ぐ事あらゞ我立出て程よく取繕ふべしといいへど此事すゐはち思切りたまへ若又彼聲をも出さゞれゞ是れ即ち十分の頼なりもし此十分の頼做遂るときにいいかなる骨折代を我にい與へたまふそと最長やしく說きけれゞ西門慶い聞畢りて喜ぶあと大方おらず王婆を拜して身の計奇なり妙おりたとへ古の張良陳平たりとも何ぞおれに及ふべきと幾度とおく聞ゆれゞ王婆い又我斯く謀るうへい心を安く持ちたまへたゞ彼の約束の十兩を忘れたまひそといふに西門慶い点頭て御身此事をゞ氣遣ひそさて此計い何日頃行ふ心にやといへゞ王婆い暮程まで

に吉左右を知らせヤさん我今武太郎が歸らぬ間に急に彼の家に行き暦の事よりして彼を賺しあしらへん大官人ハ疾く紬絹綿を買ひ送越したまへ晩くれたまふとあれといふに西門慶ハ心得たり疾くすべしとていそぎ茶店を馳出て街へ行き紬絹三疋と綿十兩とを買調へ家に歸りつやがて小厮玳安兒に言附て毛氈もて緊と包ませ直に王婆が方へぞ送らせける

譯者曰く此回尚ほ長けれバ以下ハ三の卷に分載す

原本譯解 金瓶梅卷二 終

原本譯解 金瓶梅

通俗水滸後傳 毎月發兌

通俗後西遊記 毎月發兌

通俗續三國志 毎月發兌

通俗續後三國志 毎月發兌

水滸傳西遊記金瓶梅演義三國志を漢土の四大奇書と稱するハ世人の知る所なり演義三國志水滸傳西遊記ハ譯本世に行はるゝこと已に久しといへども唯り金瓶梅に至てハ未だこれを譯せし者あし又水滸後傳後西遊記續三國志續後三國志の四書ハ前編を繙くものゝ繼て讀まざるべからざるハ論なく其作意の巧妙あるハ反て前編に勝るを覺ゆ而して此四書も亦譯本あきハ小說家の常に一大遺憾とする所あれバ是れ今般槃舗に於て右五書の譯本を印行する所以なり近來世間他人の新著書を重刻するの徒ちゑなしざる頗る拙からず其書率ね校字疎漏にして誤脫多く或ハ圖畫を省き本文を畧し隨て製本も亦粗惡を極め大に著者の本意に背くの事ありたゝ自己一時の利を攫せんと欲するより他人の辛苦を水泡に歸せしむるハ豈に羞恥を識らざるの甚しきあらずや右三書の如きも忽卒印刷に附し板權を請ふに遑あらざりしを以て倘し前條の如き徒ばかにして重刻せんと欲するわらバ一應槃舗へ照會の上着手せられんを乞ふ

印行書舗 主管 敬白

明治十五年九月二十九日出版御届
同　年十月廿四日發行　（定價十五錢）

翻譯者　新潟縣平民　松村操
出版者　東京府平民　望月誠
京橋區南鍋町一丁目七番地
發兌元　東京南鍋町一丁目　兎屋誠
大阪唐物町三丁目
大賣捌　同支店
東京芝三嶋町
同　山中市兵衛